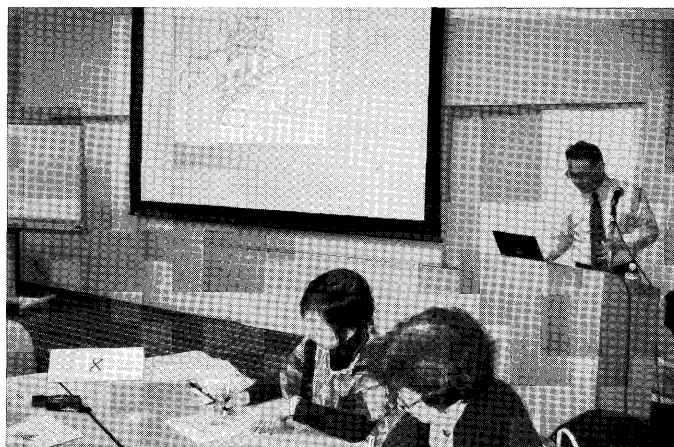


第8分科会 [カナダ生まれの親学習&支援のプログラム Nobody's Perfect によるこそ]

主催: こころの子育てインターねっと関西



●富山の現状から見た企画のねらい

95年に開始されたエンゼルプランは、子育ての楽しさや魅力を伝えることに重点がおかれ、女性のみ育児負担を課したままという内容であった。このプランでは意味のある支援にならないという思いから、都市圏では母親たちがNPOを立ち上げて「子育てひろば」を開設し、当事者が望む親支援の形を発信していった。けれども富山県内では、「親子サークル」等の子ども支援に比重を置いた指導型の公的支援が実施され続けた。そして親支援が求められている現在、県内に母親たちの本音を発信する機関が見当たらないためか、子ども支援で実績のある保育所等が親支援も担う場合が多く見られる。ところが、保育所保育指針で子育て支援が大きく位置づけられたのは08年の改定時であって、保育機関にとっての親支援は今後実績を積み重ねていくべき新しい実践分野と言える。そんな模索が始まった富山の現場へ、新しい親支援の理念と方法を提示したいと考えた。

●講演で提示された重要な視点

原田先生は、大規模な子育て実態調査に基づき、虐待をはじめとする現代日本の子育てを取り巻く問題を以下のように分析された。現代の母親たちは子育てに不得手な無能な者では決してなく、乳幼児を知らずに育った世代であること、

母子カプセル状態で孤立しながら育児をする環境にあること、このカプセル状態のために親子の距離が近すぎて子どもは親の期待に強く応えてしまうこと、親が子どもを支配しコントロールする傾向が強くなってしまふこと等の社会的な状況こそが、育児困難を引き起こしている。だからこそ現代は、子どもの権利を守るために親支援が不可欠だと述べられた。聴講された方々は、子育ての問題に日々疑問をもっておられたのであろう、大きく頷かれるなどの反応が多く見られた。

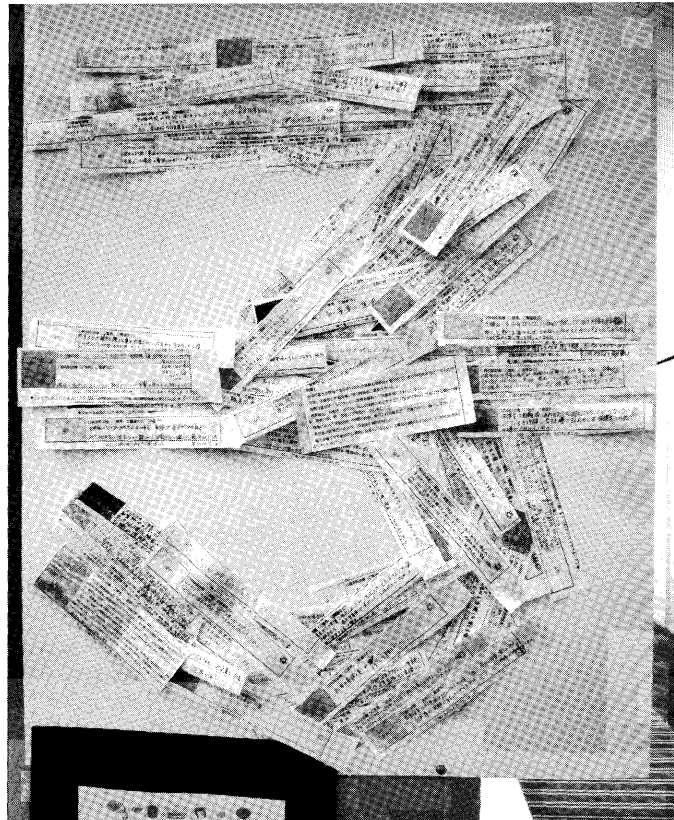
●講演で紹介された親支援の具体的方法

有効な支援方法を知りたいという参加者の思いに呼応する形で、原田先生が優れた親支援プログラムと提唱されるNobody's Perfect (以下NP)を紹介された。NPは、親自身が自分の体験を通して自分の価値観と向き合い、いろいろな価値観があることを知るという参加者中心のプログラムである。心理的な悩みの多い日本の親たちには、もっとも適していると言われた。原田先生の講演とワークショップは、とても理解しやすいものであったため、NPプログラムを実施したいという依頼を講演後に多数受けた。NPを広く紹介していきたいという、担当者の目的は大きな成果をもって達せられた。

◆講師: 大阪人間科学大学大学院教授 原田正文氏
参加者: 53名

第9分科会 [ここが好き! -子どもにとってのいい放課後の居場所って?]

主催: 水橋アドベンチャーじょうじょう/大沢野しろばと子ども会



◆地域・放課後児童クラブ有志

代表: 高松朱音、齊藤裕美

日時: 平成21年11月15日(日) 9:30~11:45

会場: 国際会議場 ホワイエ3F 参加者: 27名

○小学生の放課後事業の悩みや問題を一元化し、子どものためのよりよい活動を考える分科会

定員30名とはいえ、小学校の校長先生、行政関係者、学童保護者、経験年数の長い指導員からなりたての指導員まで、幅広いジャンルの方が、富山市・高岡市・魚津市…遠くは長野県からも参加下さり、事業の壁、立場の違いを越えて意見交換を行うことができました。

有志の小さな力での一元化ではありましたが、行政関係者のご協力のお陰でアンケートも富山県下、375枚の回答を頂き、問題抽出することができました。当日の感想も「他の市町村の状況を聞いて危機感を持った」「地域健全の指導員も子どもを思う気持ちは同じ」「学校との連携をもっと良くする努力が必要」と、これまでになかった事業間・市町村間の壁の向こうの人たちとの子どもを真ん中に置いた本音の意見交換は、「気づき」「広い視野」を得る大切な機会になったのではないかと思います。今回の分科会が、事業の枠を超えた交流のきっかけとなり、「子どもたちのよりよい環境」に繋がりますように。

○議事録(子どもの権利条約第3条、18条)

①富山県の放課後児童の現状報告

◎講師: 富山県学童保育連絡協議会 事務局長 津幡美鶴氏 ※当日資料をもとに

[内容]「全国、富山県、富山市の現状比較/富山県、富山市の現場の実情」、質疑応答。

②「これって権利? わがまま?」

[はじめに] 子どもの権利条約第3条朗読(引用「子どもによ

る子どものための子どもの権利条約」より)

[事例について意見交換]

◎子どもの心に寄り添う。どんな場合でも子どもの意見を聴く。指導員の考えの押し付けになってはダメ。

◎叱られたり、傷ついている子どもの考えを聞いてあげる姿勢が大切。

③「子どもにとってのいい居場所って?」

◎子どもをよく知るためにも、学校との連携も重要。

◎課が保育所と同じなので園児と同じ感覚で扱われるが、成長に合った対応が必要かと。

◎指導員の質を必要としない事業もあるが、どんな事業でも指導員の質を上げるために、研修や意見交換の場を活用していく意識は必要である。

④まとめ~自分でもできそうなこと~

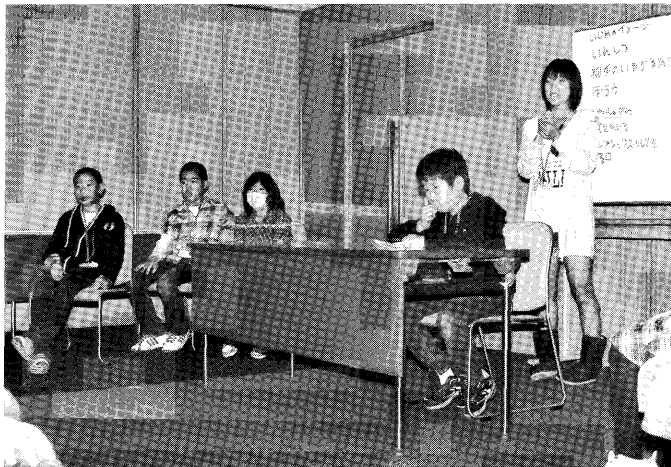
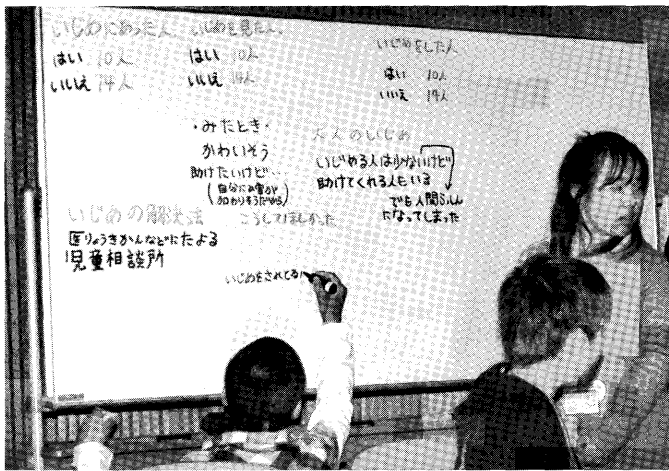
[参加者一人一人、自分の言葉で、子ども達にこれからしていきたいことを発表]

◎学童保育だけ、全児童事業だけ、充実すればいいというものではなく、放課後事業全てが充実することが放課後の子どもの居場所を良くするために必要なのではないかと。

◎このようないろいろの立場の垣根を越えた交流で子どもを真ん中に置く重要性を活動に取り入れていくことをどの立場の大人も子どものために考えていく必要性を感じた機会であった。

第10分科会 [いじめをなくそう]

主催: 子ども実行委員会



◆子ども実行委員会に参加して

ぼくは、最初「子どもの権利条約」というのを知りませんでした。第0回から参加しているうちに、「子どもの権利条約」というものを知りました。それは、第42条まであり、子どもは、だれでも自分が生まれる所を選べない。どこの国に生まれるか、どんな家庭に生まれるか、はだの色、性別など、すべて引き受けて生きていく、世界中の大人たちは、すべての子どもたちの人けんを守り、心身ともに健康に成長できる社会をつくらなくてはならないという約束です。

日本は1994年に参加し、今は、200近い国々がこの条約に賛成しているそうです。日本は、ひかめの子どもは、守られていて、生きるために受けられる当たり前のことができるけれど、世界では、まだまだ子どもたちが守られていないのが現状です。

以前、ぼくが見たテレビ番組で、大人の都合によって、きびしいかんきょうで働かされている子どもたちを見ました。ぼくはその時とても心がいたみました。ぼくたちとおなじ子どもなのにぜんぜんちがう生活をしているからです。

そういうことを知ると、世界の中で子どもの権利条約が必

要だと真剣に感じました。

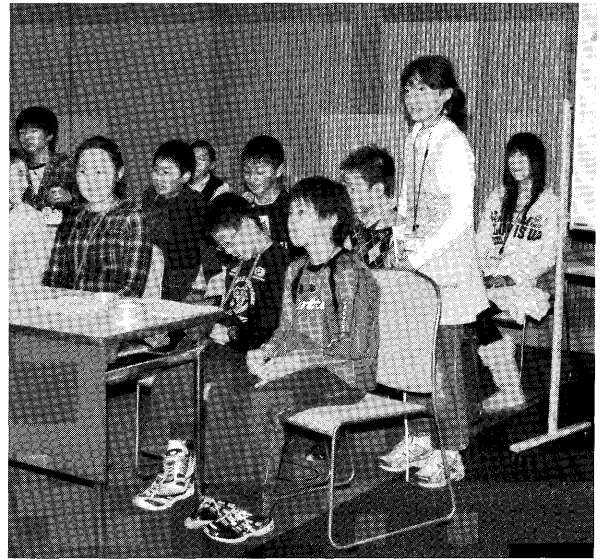
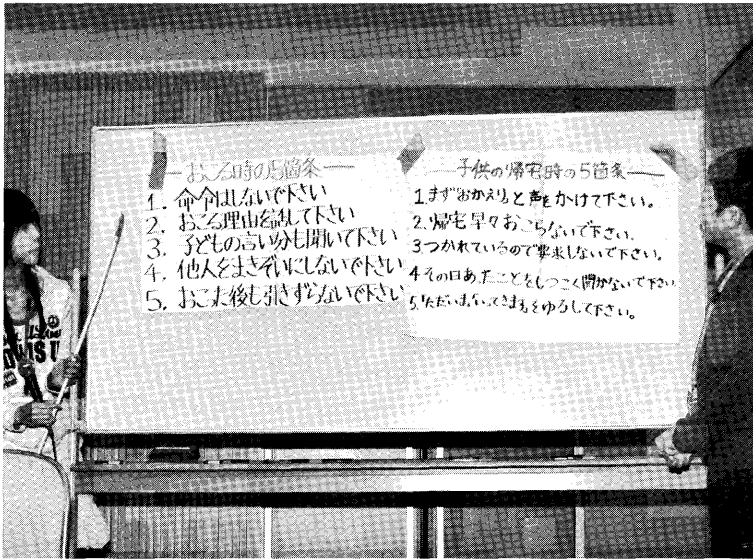
日本でも、いじめや差別など、色々な問題があります。もしかしたら一人でなやんでいるかもしれません。それを少しでも無くするように努力し、一人一人がかいてきに、幸せに生きていけるような社会をつかっていきたいと思います。

[子ども実行委員 佐野 匠]



第11分科会 [おとなへの不満]

主催：子ども実行委員会



◆「僕は自分の両親を嫌いになったことが全くありません。」こんなことを言ったら嘘になりますが、しかし僕は胸を張って、「僕は自分の両親が大好きです。」と、言うことができます。それに、学校にも大して不満はありません。

では何故自分がこの「フォーラム子ども実行委員会」に参加し、さらに「大人への不満」の分科会のメンバーになったのか。理由は「他の子どもたちは大人にどんな不満を持っているのだろう。」というものが最も大きくありました。自分は大人にそんなに不満を持っていないけれど、皆は大人のことをどう思っているのか。それが知りたかったのです。

しかし、自分と皆が違うところは、大人をみる視点や大人に対する思いではありませんでした。自分と皆の違いは、各々の周りの大人だったのです。子どもたちは「大人」に不満を持っているのではなく、「大人の行動」に不満を持っている、ということでした。

分科会は主に、「大人がするいやな行動って何だろう?」というところから始まりました。皆で自分たちの日頃の大人への不満をぶちまけたのです。すると面白いことに、小学生は学校の先生に関する不満が多く、中学生は親への不満が多かったのです。まだいろんなことに慣れていない小学生は先生というものがよくわからず、「何故授業でひいきをするのか。」とか、「理由もよく聞かず怒らないでほしい。」などの意見があり、多感な中学生は、よく話しかけてくる親がうっとうしく感じるようで、「しつこくその日の学校でのことを聞かないでほしい。」とか、「いちいちあれしなさい、これしなさいと言わないでほしい」などの意見がありました。

そこで僕たちは親への不満と先生への不満で2つに分かれることにしました。

そして親担当の僕たちが作ったのが、「親に守ってほしい5箇条2つ」でした。自分たちでも納得のいく出来栄えだったと思います。

そして、分科会。僕たちは5箇条2つを大人の人たちに説明すると、自分たちの体験談を各々話していきました。

今までの自分たちの意見を大人に聞いてもらって、これにたいして大人はどんなことを思っているのかを僕たちが聞く。これこそ大人と子どもの話し合いだと感じました。

前述の子どもの意見、「何故、授業でひいきをするんですか。」という問いに「どうしても、授業で誰にあてようか困ったときは、頼ってしまうんです。」と大人が返していました。先生というのは、生徒に対して公平な存在でなければなりません。しかしこの意見を聞くに、先生も困ったときは安易な手を使ってしまうようです。

前述の子どもの意見、「しつこくその日の学校でのことを聞かないでほしい。」という問いには「親というものはいつも不安で、毎日学校でのことを話してくれないと、自分は信用されていないのかと思ってしまう。」と大人が返していました。信用されていないと心配するよりも、まず先に、親が子どもを信用しなければならないと思います。

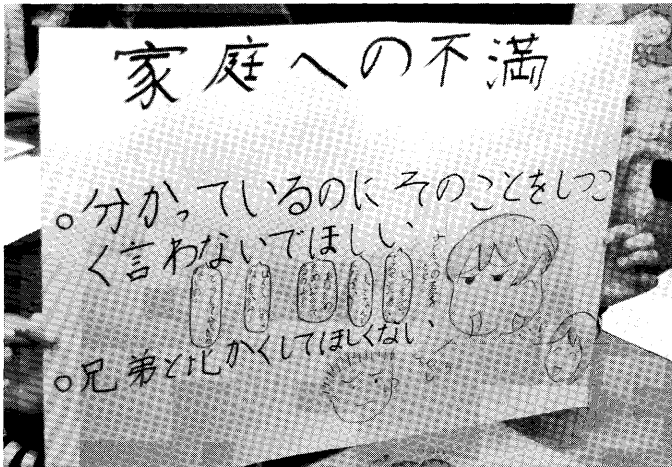
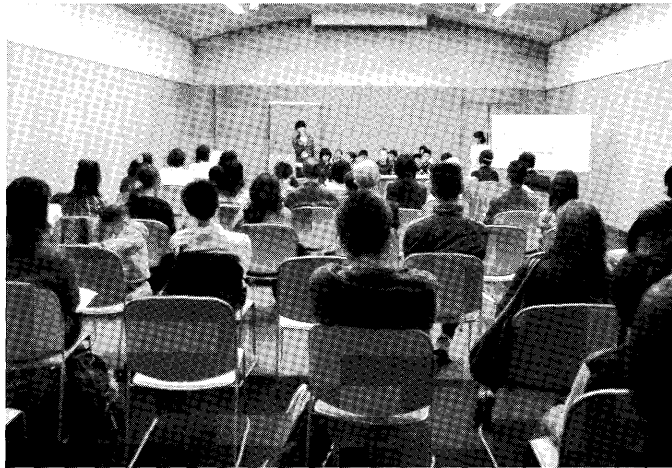
大人にも困ることはあるし、子どもと同じように大人も子どもが分からないことがあるようです。

分科会というかたちですが、こういう対等な話し合いでお互いに意見を言い合う機会がこれからも増えていけば、自然と「子どもの権利」というものは守られていくのではないかと思います。

[子ども実行委員 須賀奎太]

第12分科会 [学校・家庭のこと]

主催：子ども実行委員会



◆僕は、学校・家庭のことについてという分科会をしました。僕がなぜこの分科会に決めたかという、子ども実行委員の友達と話しをしていて楽しそうだったからです。

5月に学校からチラシをもらって、どんなことをするのかよく分からなかったけど、楽しそうだなと思って子ども実行委員に申しこんで、何回も実行委員会に参加したり、1泊2日の合宿に参加したりして、いろんな学校の小学5年生から高校2年生までの人たちと友達になって、いろんな話し合いをしました。でも実行委員会は、月に1回くらいしかなくて僕は、途中めんどくさくなって、どうして子ども実行委員になってしまったんだろうと後悔したり、いろんな気持ちになりました。それでも、みんなと集まると最後まで頑張ろうと思ったので頑張りました。

この実行委員になるまでは、考えたこともない事や知らない事がたくさんありました。

権利条約フォーラムには、たくさんの方が来てくれました。僕はリーダーだったのであいさつをして、みんなで話し合った学校でのうれしい事やいやな事、家庭でのうれしい事やいやな事を発表しました。参加してくれた人たちも、いろんな意見を言ってくれました。でも僕には難しすぎて答えられませんで

した。

分科会の時のことは、緊張していてあまり覚えていないけど、最後までやりとげる事ができて本当に良かったです。

このフォーラムに参加するまでは、どうして実行委員になっただろうって思ったりしたけど、フォーラムが終わった今は、学んだことを学校や家で自分なりにやってみたり、相手の権利のことも考えたりできるようになったり、自分自身の成長につながったと思うので、実行委員として参加できてとても良かったです。今度また、フォーラムがあったとしたら、実行委員で参加したいです。

[子ども実行委員 久保竣太郎]

